
エルハード文書

尚文産商堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルハード文書

【Nコード】

N4129L

【作者名】

尚文産商堂

【あらすじ】

エルハンドラ帝国皇帝陛下に奏上申し上げ、大命により臣下に広く広めよとの事に従い、本書を書く。

第1章 目次

この文書は、エルハンドラ皇帝に奏上するものであり、皇帝が過去、現在、未来を見通すための教本となるものを目的としている。

一方、奏上後、この文書を一般に分布することを命じられ、著者たる公爵は、章を改め、項を廃し、誤字脱字を訂正し、最終的に1冊の本として出版するという運びになった。

本書は、エルハンドラ帝国のことに関する帝国暦1500年時点の話であり、その後はどのようなのかはわからない。だが、最高神官からの神託、これまでの帝国の歴史を調査している歴史家、法学者等、多大なる方面より、さまざまな援助を受け、できる限りのことをさせていただいた。

本書を著するに当たり、エルハンドラ帝国皇帝付き最高神官であるイカムルード氏から神託を受け今後のエルハンドラ帝国に関する知識を、エルハンドラ帝国皇帝付き侍従長であられるジルサンデル氏からはエルハンドラ帝国の過去に関する知識を、エルハンドラ帝国立大学法理学科教授であられるツツカム氏からは帝国法に関する知識を、エルハンドラ帝国行政部門長であられるツベクウイワ氏からはエルハンドラ帝国全般の産業、人口分布、工業等さまざまな知識をいただいた。改めて、御礼申し上げます。

エルハンドラ帝国とは、エルハンドラ大陸のみならず、世界3大陸を統治している帝国である。

この帝国には、帝国暦1500年時点で、35億の人間が住んでいる。

さらに増え続けており、いまだに収まる傾向がない。

複数の人種がいるが、各大陸に一つまたは二つという割合で主要な人種がいる。

詳細は、第2章で語る。

帝国全土は3つの大陸、15の区、900の基礎公共団体、5 / 6 13 / 089の市町村がある。

各市町村は複数集まり基礎公共団体を構成し、基礎公共団体は、60ずつ集まり区を構成する。

区は、3つの大陸に5つずつあり、帝国の行政を助けている。

詳細は、第3章で語る。

工業、商業は、各基礎公共団体ごとの中央都市に集中しており、さらに高次の行政区画の首都である都市へさらなる集中している。

詳細は、第4章で語る。

第1次から第3次工業へかけての状況は、大陸ごとによって異なっている。

特に、サルード大陸とコルスティック大陸の間は第3次産業に置いて顕著な差がある。

詳細は、第5章で語る。

各市町村、各基礎公共団体、各区ごとに議会があり、上級の立法部署から任命を受け、それぞれの立法部門を統制している。

一方で、帝国議会においては、皇帝からの勅命によって議員が選出される。

ただし、それぞれの立法議会に関しては、選挙をもって半数を選ぶという事になっている。

詳細は、第6章で語る。

建国神話は、非常に長いものであるがために、それを全て書く事は、

紙が足りなさすぎるため、必要な部分だけを抜粋し、載せることにした。

詳細は、第7章で語る。

エルハンドラ帝国は、エルハンドラ王国というのが当時の名前だったが、スルディルクロツチ大陸のカワスール平原で生まれ、周辺の国を併合したり、連合を組んだりして広げていった。

詳細は、第8章で語る。

その後、エルハンドラ帝国は、一つの大陸を制圧すると同時に、他大陸へ進出を果たした。

繁栄期として記憶されている期間は、500年間に及ぶ。
詳細は、第9章で語る。

現在から未来にかけてのことに關しては、イカムルード氏より情報を提供していただき、第10章以下で語るものとする。

第2章第1節 サルード大陸

エルハンドラ帝国全土の人口分布は、大まかに大陸ごとに分かれる。本章では、大陸ごとに人口分布、民族分布などを節に分けて説明をしていく。

サルード大陸では、中央部の草原地帯を中心にいる遊牧民族であるサルツヒズ族、南側で狩猟を主に行って生活をしているヒッグズ族、ルードル族、北側の寒冷山岳地帯にいて、鉱物を掘り生計を立てているジョインズ族が少数民族として存在している。

それぞれ帝国以前に国を成立させており、現状として緩やかな連邦状態である。

現在では、サルツヒズ国、ヒッグズ国、ルードル国、ジョインズ国は、それぞれが帝国の行政区分における”区”の扱いを受けている。詳細は、第3章で語らせていただく。

地域では、大まかにそれぞれの民族が居住している地域ごとで気候は大きく変わる。

サルツヒズ族の周辺では、乾季と雨季が交互に現れる。しかし、スコールのような大雨は降らず、かといって、日中気温が40度にもなるような乾季でもない。その結果、1年を通して、草原が繁茂する地域となった。

ヒッグズ族とルードル族は、エルハンドラ帝国と連邦状態になる前は、互いに争いが絶えない地域だった。それは、低木が茂る地域であったからであり、この地域に、2つの民族が共存できるような広さがなかったからである。一方で、昔より、争いを鎮める方法として、互いの族長の娘を交換し、嫁がせるということを行ってきた。

その結果、民族殲滅といったことを考えることはなく、大がかりな武力を伴った争いは起きなかった。

ジョインズ族は、北部の寒冷地帯一帯に生活拠点を置いており、その地の年平均気温は、0.5度となっている。夏でも雪が融けきることではなく、外へ出てくるときは、サルツヒズ族との物々交換の時間ぐらいである。彼らの家族の結びつきは非常に強く、生活は、民族単位よりも家族単位で行われていると言っても過言ではない。それぞれの家族が、どの鉱物の採掘許可があるかということを決められており、それを破った者には、家族ともども追放するという制裁が科せられる。

上記のような少数民族と対照的に、大陸全土にわたり生存している民族は、チューリトズ族とカワツキズ族である。この2つの民族は、中枢民族と呼ばれ、エルハンドラ帝国成立以前に、サルード大陸を二分するような勢力へ成長していた。だが、我が帝国に対して、チューリトズ族から宣戦布告されたがため、今では、主要民族とは呼ばれるが、中枢部分にはほとんどいない。

彼らはともに、サルツヒズ族から派生したと考えられている。しかしながら、チューリトズ族は、どちらかといえば、ヒッグズ族とルードル族に近く、カワツキズ族は、既存の民族のいずれとも近縁種と確認されていない。

両民族とも、手先が器用であり、昔は加工貿易を、今では精密機械の製造を行っている。

大陸全土は温暖湿潤気候であるが、部分的に異なる部分もある。

大陸中央部は、乾燥地帯が占めており、そこより吹く乾いた風は、周囲に砂を運んでいる。一方で、周囲の湿潤気候の影響で、完全な乾燥地帯とはならず、さらに、北部にある山脈より流れてくる冷たい川によって、気温の上昇も抑えられている。その結果、低木地帯が広がり続けている地域もあり、砂漠地域は縮小を続けている。海岸沿いは、北部の寒冷地帯をのぞき四季がはっきりとしており、しかし、冬は弱弱しく感じられる。

低木地帯は、雨季と乾季の2つにわかれており、低木地帯と乾燥地

帯の中間付近にある草原地域でも、その特徴をみることができる。

第2章第2節 コルステイック大陸

コルステイック大陸は、人が住めないような地域が延々と続いているため、少数民族であるキヤツタ族が中枢民族として登録されている。

東西の赤道を中心に長細い大陸であり、気候にほとんど差異は見られない。

だが、大陸のほとんどの地域で火山が活動中であり、有毒ガスがほぼ常時噴出されている影響で、動物はおろか、植物もほとんど生えることができない。

しかし、火山が活動していない地域もあり、その部分にキヤツタ族が住んでいる。

漁業を主な生活の糧としており、狩猟や採集は文化としてはほとんどない。

火山の影響が激しく、大陸全土にわたり、常時、立ち入り禁止とされている。

だが、キヤツタ族が生活拠点としている所に対しては、制限付きながらも、外部からの人を入れることができるようになっていく。

海からの暖かい風の影響で、1年を通して温暖な気候となっている。

エルハンドラ帝国成立時までには、火山は噴火を開始しており、キヤツタ族も、大陸のあちこちに分かれていた。現状では、1つの中央都市に対し、4つの地方都市があり、それらが区の首都とされている。基礎公共団体は、その都市を細分化することによって構成されており、各都市は、通常の国ほどの規模がある。

町村はなく、すべてが市とされている。

現状では、火山を観光資源にしようとするいろいろな取り組みをしている
ようだが、帝国政府が、立ち入り禁止を解除しない限りは、観光資
源化することは不可能だろう。

第2章第3節 スルディルクロツチ大陸

エルハンドラ帝国の最初に生まれた土地であり、首都がおかれているスルディルクロツチ大陸は、6つの少数民族、2つの主要民族、1つの中枢民族がいる。

スルディルクロツチ大陸は、海岸から徐々に内陸へ入ると標高が高くなり、3000mを境に急激に山は高くなるという傾向がある。コルストック山地といわれている山地には、エルハンドラ帝国で最も高い9102mのコルストック山があり、その山にある氷河により、1年じゅう清流が流れている。

川沿いが最も緑豊かな土地で、そこから放射状に川が広がっている影響で、下流になるにつれ、ジャングル地帯となっている。

そのジャングル地帯は、スバツクローク族、カワオルイータ族、ヒヨゴバン族の3民族が暮らしている。

互いの首長は、エルハンドラ帝国成立以前に同盟関係にあり、一体の国として運営されている。

なかでも、スバツクローク族は、主要民族のひとつに数えられており、ジャングル地帯を束ねている。

エルハンドラ帝国の議員にも数多く送り出している民族のひとつである。

海岸沿いは、コルストック山地を挟んで東西に、それぞれ2民族ずつ暮らしている。

北東地域にはサルコウジヨ族、南東にはスルダーヌ族、北西にはスルーズ族、南西にはハラスイッテイ族が住んでいる。

どの地域にも共通しているのは、温暖湿潤気候であるということである。

中でも最も土地が豊かである地域となっているスルダーヌ族は、主

要民族として認定されており、この4つの民族を束ねている。ジャングル地帯と山の間には、広大な草原があり、そこには、イスルード族とマルステック族がいる。イスルード族は、現在の皇帝陛下の出身民族であり、中枢民族となっている。マルステック族は、イスルード族と仲が悪かったが、数百年前に和解をして以来、蜜月が続いている。しかしながら、部族の人数が少ないためマルステック族は少数民族として扱われている。

第3章第1節 サルード大陸

本章では、各大陸ごとに分け、いかに各大陸の土地が使われているかを記したい。

最初にサルード大陸である。

この大陸には、住居可能面積が非常に広大であるが、しかし、実際に使用されている面積は少ない。

総面積390万平方キロメートルのうち、住居可能面積は約8割ある。

一方で実使用面積はそのうちの3割に過ぎない。

これは、都市部に過度に集中しているために、周囲に住居を作らなためである。

しかしながら、結果として、都市より遠くないところに雄大なる自然が残されてもいる。

その結果、周囲の区域は、公園として整備をされ、さまざまなレクリエーションを行うことや、小学校、中学校などの自然学校として利用されている。

サルード大陸は、北部に3000m級の山脈が連なっており、そこから複数の川が流れている。

川は大きく3つの水系に分かれていて、東より、サルジルドル川水系、ミルイージン川水系、ヒスロールド川水系と分かれており、すべて北部山脈に水源を有している。

サルジルドル川水系は、河口に行くにつれ、徐々にひとつの川へ収束する。

その川の名がサルジルドル川といい、その支流は100を超える。河口に行くにつれ、川幅が徐々に広がっていき、それに伴って、橋

の数も減少をする。

長い区間の橋脚工事ができるような工業力を持つことができるようになったのは、この数年の間の話であり、それまでは、基本的にフェリーによって対岸同士の物流を結んでいた。

ミルイージン川水系は、中央草原にて蛇行をしている川である。

そのため、三日月湖が多数存在し、草原の水源ともなっている。

支流からの流入はほとんどないが、分流することは多くあり、中央草原よりほとんど南北方向に対して平行にして流れているミルイージン川の本流以外は、基本的に途中で地下へともぐり、草原地帯の地下水脈を形成している。

本流は、ほとんど川幅を変えずに河口へ到達し、その結果、川のうちここに橋がかけられ、その周囲には町が出来上がった。

ヒスロールド川水系は、分流も支流もない。

一方で、その相当な水量は、一年を通してほとんど変わることがないため、治水計画を最も立てやすい川として知られている。

周囲には、古来から行われてきた治水事業の跡が、史跡に指定されており、今なお稼働し続けている堤防や、可動堰など、数々のものが直接手に触れることもできる状態である。

魚の遡上など、漁業も盛んであるこの水系は、この大陸の3水系の中で最も栄えているものと言えよう。

中央草原付近では、蛇行をしているミルイージン川の影響で、大規模な都市が形成されることがなかった。

そのために、小規模の集落同士が、川を使い互いにつながりあっているという生活形態が生まれた。

その集落一つ一つが市町村の指定を受けているため、この平原だけでも数万を優に超すほどの市町村が存在している。

海岸沿いは、都市が密集し、現在ではどのように区分けされているのかが分からない状況になっている。

それを防ぐため、本書の1年前に新たに市町村の指定を行い、数十万の市町村が新しく誕生した。

大陸でもっとも栄えているコングルイス市という大陸の首都である都市は海岸沿いにあり、人口300万を超えるほどの巨大都市に成長している。

この都市は、帝国へ編入される前は、自治都市として長き間、周辺の町を束ねていた。

都市の中央にはスベツカイ神をまつている神殿があり、それを中心に同心円状に市の区画がある。

その市の区画一つ一つが町と同等であり、また、町として扱われている。

この大陸で180万もの市町村が存在し、それらを300の基礎公共団体へ集約される。

集約されるのは、周辺を強制的に併合する形で、基礎公共団体とされる。

さらに、人口が出来る限り一定になるように基礎公共団体を60ずつ編成し、各大陸に5つある区とした。

各基礎公共団体は人口が100万程度になるように設定されている。そのことは、すべての大陸で共通している。

第3章第2節 コルステイック大陸

続いて、コルステイック大陸について。

コルステイック大陸では、主な産業を漁業に頼っており、他の産業は皆無に等しい。

よって、5つある都市は、すべて、漁業に適した区割となっている。

詳細を言えば、以下のようなになる。

大陸首都たる、中央都市では、海に面している海岸の8割が港として使われており、市民の99%がなんらかの船を有している。

地方都市でも似たような状況となっており、中枢民族であるキャツタ族が海については帝国一といわれている。

都市内部の陸地は、住宅地区と商業地区の二つに大別でき、工業地区は、手工業といった小規模なものに限られる。

商業地区も、魚介類を扱う店が海岸沿いに軒を連ね、その他食料品は、主に住宅地に点在している菜園で栽培するか、他大陸より輸入するよりほかない。

大陸全土を俯瞰すると、中央都市並びに地方都市以外の地域は、帝国政府によって厳しく立ち入りが制限されている火山の活動帯となっている。

帝国成立以前にすでに活動を始めており、帝国政府職員による地質調査の結果、約4500万年前より火山活動が始まっていることは分かっている。

それ以前は、不明だ。

第3章第3節 スルディルクロツチ大陸

スルディルクロツチ大陸は、首都たる中央都市が置かれている大陸である。

肥沃な土地が続いており、そのほぼ中央に首都たる中央都市が設置されている。そこより半径3600は、政府の直轄地域であり、さらにその周辺の土地は、エルハンドラ帝国の直領となっている。

ジャングル地帯の各民族の境界線は一定せず、川の動きとともに1年中移動を続けている。それぞれは、デルタ地帯を取り合っているが、エルハンドラ帝国に従属もしている。各国家の仲裁は、皇帝直々に行われ、その裁量は、全ての規則の上位に位置することとなっている。その結果、現在では川の変動に伴い境界を移動するということでまとまっている。

それぞれの民族が治めているところが、そのまま区として取り扱われ、さらに集落ごとに市町村令が発布されている。

草原地帯を治めている民族は、首都たる中央都市を中心として、東西へ分かれ、直接会うことはない。その結果、動乱は数百年は起きておらず、平穏な時期となっている。草原に広く点在している住居は、1家族ごとが1住居という構成をとっており、それぞれが市町村と同格とみなされている。

海岸沿いは、中央都市を除いて基本的に人はあまり住んでおらず、小さな漁村がいくつか点在しているにすぎない。しかし、漁村の一つが市町村と同格と扱われ、中央都市には複数の市町村が融合した体裁をとっている。現在、海岸沿いのみならず、陸地へとその勢力をわずかに拡大を続けている。

第4章第1節 サルード大陸

本章では、商業、工業について、各大陸ごとに語る。

初めにサルード大陸より。

サルード大陸は、北部にある山地に鉱業が発達し、都市部ではサービス業が、郊外では近傍で軽工業、遠くなるにつれ大規模な重工業を行っている。

ただし、このような重工業地帯は、大都市より離れた小都市において行われていることが多く、ジャングル地帯、草原地帯より遠く離れている。

現在では、重工業は、新たな資源の一つである石油を基にした繊維業、燃料等に生成している。

北部鉱業地帯では、鉄、ニッケル、アルミニウムといった金属類を主に発掘しており、黄鉄鉱、黄銅鉱、石灰石を産出する場所もある。いずれにせよ、我が国の重要な鉱物の採取場所に違いはない。

都市部に目を移せば、運送、商店、スーパーと言った第3次産業が高度に発達をしている。特に運送業は、1つの都市にとどまらず、大陸全土、さらには他の大陸にまで輸送を可能としている。ただし、空を飛ぶことができないため、海路による運送となるため、日持ちがしない物は運送することができない。

第4章第2節 コルステイック大陸

コルステイック大陸は、第1次産業、第2次産業、第3次産業がまんべんなく分布している。畑の横に、工場が立ち並び、脱穀をした物を運送を行うということが続け、都市が満たされている。

火山が並んでいるため、使える土地が少ないということもあり、漁業が主な1次産業とされる。よって、魚を主原料とする練り物、缶詰、刺身などが主食とされており、主要輸出品にもなっている。

第2次産業としては、それらの輸出用に加工するための設備である。各都市を結ぶ道路は、火山によりほぼ毎日封鎖されるため、いつしか忘れ去られた。その一方で、造船所は繁盛しており、それらの原材料となる鉄、ニッケル、アルミニウムといった素材を加工し、船や鉄骨などを輸出するという加工貿易の拠点となっている。

第3次産業として、サービシ業があるが、大陸のどのようなところでも輸送をすることができるように、火山の高熱やガスに耐えられるような特殊なシールドを開発し、輸送をするようにされている。

第4章第3節 スルディルクロツチ大陸

スルディルクロツチ大陸は、第3次産業が中心となっている。

ジャングル地帯は、帝国成立以前より船を使い、専門の者が物流を担っていた。これは、帝国史において、もっとも初期の頃にあたる。

現在では、道路網、鉄道網が高度に発達をしているため、船を利用する者は少なくなっている。しかしながら、現在においても、道路が創ることが困難であるジャングル地帯では、船を交通の手段として使用をしている。

皇帝陛下がおられる帝国の首都たる中央都市においては、物流の拠点となっており、郊外には巨大な倉庫が軒を連ねている。倉庫街より伸びる道路や鉄道は、四方へ延びており、そこより流れ出る物流は、とどまるところを知らない。

沿岸部へ眼を移すと、都市同士をつなぐ巨大な動脈としての航路があり、数万トンクラスや中には数十万トンクラスの船が行き来している。そのような都市の周辺にある市町村では、都市からの船が毎日行き来をしている。

夜に港にいても、常に行き交う船が見られることであろう。

第5章第1節 サルード大陸

この章では、前章で説明をした土地の利用状況に応じて、どのような第1次産業、第2次産業、第3次産業が発展しているかを説明する。

サルード大陸の土地は、前述の通り、軽工業や重工業といった第2次産業、鉱業といった第1次産業を中心に発達している。

第1次産業については、農業系統も存在はするが、それは別の大陸に依存しており、自給率は5割をわずかに下回っている。しかし、鉱業による生産は他の大陸の追隨を許さず、帝国全土のおよそ8割を占めるほどである。

そのような豊富な鉱物に支えられ、重工業は高度に発達をしている。鉄鋼の生産量は、帝国が発展するに従い増える一方であり、それらを下支えしている発電所についても、次々と設置されているが、今なお需要に追い付いていない。

造船業についても特殊な需要についても許容できるように、さまざまな技術が発展した。現在では、重工業とも軽工業とも分類はされていないが、IC関連の企業も、順次設立をされており、今後の発展が待たれる。

一方の軽工業については、木綿の生産を主として行っており、絹についても地域は限定されるが行っている。それらをより合わせ、布として帝国全土へ輸出を行っており、我々が着ている服のうち約35パーセントが、サルード大陸にて生産されたものである。

第5章第2節 コルステイック大陸

コルステイック大陸は、前述の通り、火山の大陸である。

火山が大陸の大半を占めているため、有効に使える土地は、住宅として使われている。第1次産業は、ほぼ行われていない。だが、農業ではなく漁業は各都市の基幹産業の一つとなっている。

第2次産業として、火山より噴出される火山弾および溶岩に多く含まれている鉄を精錬し、純度を限りなく100%としたうえで、火山鉄という名称でインゴットを販売している。なお、その他金属類も火山から採ることができ、砂状として他大陸へ輸送がされている。第3次産業は、船による輸送業が主に産業としていうことができるだろう。都市部においては、車より自転車による人力輸送が主として行われている。これは、車が通ることができないほど狭い路地が多く、さらに入り組んでいることにより小回りが利く輸送手段を求めた結果、自転車にたどり着いたという。

第5章第3節 スルディルクロツチ大陸

スルディルクロツチ大陸における産業は、中央都市を中心とし、外側に第1次産業及び第2次産業が育っている。

第1次産業は極めて多種多様であり、農業、漁業、鋳業、さらには林業に至るまで、幅広い業種を含んでいる。特に林業は、無尽蔵とも思われるジャングル地帯より採れる木材は、帝国全土に運ばれ、第2次産業とする加工業により加工され、さらに第3次産業である輸送業によつて全土の帝国民に輸送されている。

第2次産業は、主に輸送業であり、また建設業も同様に盛んである。帝国全土にその名を轟かしている4大建築会社は全てこの大陸の中央都市に本社機能があり、また税務上の本社も同様である。

第3次産業たる電気ガス水道と言つたライフライン、輸送業といったサービス業は中央都市と各都市を強固に結ぶ鉄道網及び自動車専用道により、極めて活発に行われている。

その他分類とされる、第4次産業について簡単に記しておく。大学及び大学院をはじめとする高等教育機関、公務による行政、軍による消費業についても本大陸は、他の大陸の追随を許さない。大学は、最高峰とされる第1国立大学があり、受験者数は数千万ながらも、合格者は1万を切るほど倍率が高い大学である。軍については、最高司令部が中央都市に設置されており、その建物は周囲を威圧するかのごとく、巨大な建物となっている。なお、建物の一部分は軍の博物館となっており、一般民も入ることができるようになっており、観光名所ともなっている。

第6章第1節 サルード大陸

この章では、議会について記す。

サルード大陸の議会は、大陸議会並びに区議会の二つより成り立っている。

大陸議会は、サルード大陸全土の議会であり、区議会とは、行政区分の区に設置されている議会である。

大陸議会では、比較的広範な制度について決定を下し、区議会では、大陸議会が決定した規範に従って、さまざまなものを実施することになる。

なお、区より小規模である基礎公共団体についても、議会があるが、そちらについては特に名称が決まっておらず、一般的には基礎議会と言われている。

基礎議会は、区議会よりも多様性が保たれており、それぞれの住民に密着した形で議会が運営されている。

これらの議会は、さらに上位にあるエルハンドラ帝国議会が規定する全国に適用される規則に従って運営される。

帝国議会については、また節を改めて説明する。

第6章第2節 コルステイック大陸

コルステイック大陸についても、サルード大陸と、ほぼ変わらない。

コルステイック大陸についても、大陸議会と区議会の2つより公式には議会は成り立っている。大陸議会は定員150名となっており、区議会はそれぞれ区で300名の定員となっている。

大陸議会と区議会の権能は、サルード大陸と違う点はない。これらは帝国法で画一的に規定されているものである。

基礎議会では、区議会への提言を主に行うという点で、サルード大陸と異なる。だが、それぞれの基礎公共団体ごとに議会が設置されているわけではなく、複数の基礎公共団体が寄り集まり議会を構成している。そのため、議員定数も30名から150名ほどまで幅広く存在することになっている。

第6章第3節 スルディルクロツチ大陸

スルディルクロツチ大陸は、他の2大陸とはわずかに異なる。

そのわずかな差とは、エルハンドラ帝国の議会の中心となる最高議会の存在である。この議会は他の大陸議会や区議会の上位に存在する議会である。このため、節を改めて説明する。

大陸議会や区議会は他の大陸と同様に存在をしている。しかしながら、それらの議会は首都たる中心都市については、影響を及ぼす事が出来ない。首都たる中心都市については、首都議会という名称で大陸議会と同等の権限が与えられている議会によって条例等が策定される。このため、首都の範囲であると政府により規定された範囲においては大陸議会は手を出す事ができないし、首都以外の範囲であれば、首都議会は無力である。

なお、その他の点においては、大陸議会と首都議会の差は無い。

第6章第4節 エルハンドラ帝国中心議會

中心議會は、各大陸より選ばれた議員および勅撰によって選ばれた議員によって成り立つ。

各大陸で定められている方法によって、選任議員は選ばれる。それぞれの大陸ごとに、大陸議會によって定められるために、大陸によって選任される方法は異なる。そのため、選任は3種類に分けられる。

サルード大陸は、区議會によって指定された者より、大陸議會が指名を行い選任されたとみなす。

コルステイツク大陸は、各基礎公共団体ごとに選挙を行う。選挙は小選挙区制となり、1選挙区より当選者は1人のみである。

スルデルクロッチ大陸は、大陸全土を1つの選挙区として定めている。当選者は、得票数の多い順に決まり、各大陸に与えられている人数に達するまで、当選とする。

勅撰議員は、皇帝陛下が指名した者もしくは大陸議會が陛下へ奏上し、裁可を受けた者、または一定の役職にいる者が選ばれる。

なお、爵位を得ている者のうち公爵または侯爵は全員が、その他の爵位を得ている者は、互選によって一定の人数が議員となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4129/>

エルハード文書

2011年11月16日13時44分発行